コントラクト外伝　－紅い薔薇と白い薔薇－

織田撫子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コントラクト外伝　－紅い薔薇と白い薔薇－

【Ｎコード】

Ｎ９５９４Ｖ

【作者名】

織田撫子

【あらすじ】

コントラクト番外編。ミラーカ過去編です。

第1話　スカーレット

例えるなら、それは紅い薔薇のようだった。鋭い棘とさらには毒すらも持ち合わせていそうな艶やかで鮮やかな紅い薔薇。

それが私の母と言う人だった。

子供の私の目から見ても母は美しい人だった。白くて滑らかな肌、ストロベリーブロンドのウェーブがかった艶のある長い髪、くっきりした顔立ちに映える大きなとび色の瞳、細い四肢と反して女性的なラインの体躯。

そんな美しい母と生き写しだと言われ、エリザベートが紅い薔薇なら、お前は白い薔薇だね、と喩えられることが、とても嬉しかった。

母はいつも夜に咲く大輪の薔薇だった。どのパーティに行っていつも注目の的。その度に私と父は鼻高々で、父が母を妻に迎え自分がこの世に生を受けたことを感謝するほどに、自慢の母だった。

でも、12歳になって一際母に似てきたと持て囃されて喜んでいたのも束の間、父の様子がおかしい事に気付いた。

「お父様、どうなさったの？　最近ずっと元気がないわ。誰かに嫌なことを言われたの？」

いつもは朗らかだった父がその頃毎日沈んだように浮かない顔をしていた。また意地悪な侯爵に文句でも言われたのかと心配して声をかけると、父は顔を上げて溜息を吐いた。

「お前はエリザベートに生き写しだな。どうか、お前はエリザベートの様になるな。お前は白いままでいるんだよ」

父の言った言葉の意味は、全く理解できなかった。私も父もあれほど愛して自慢に思っているのに、父は母を拒絶している。

不思議に思い首を傾げる私に、父はそれ以上何も言わなかった。

でも、ある日メイド達の会話が耳に飛び込んできた。

「エリザベート様は、フェルデン侯爵と不倫している」

「フェルデン侯爵のお子を身ごもっておられる」

母の裏切りを、知った。

問い詰めようと、母の部屋に行くと、母と父が話をしている最中だった。興奮していた私はそれを気に留めることなく、母に詰め寄った。

「お母様、どういうことですか？　メイド達の話を聞きました。お母様は、私とお父様を裏切る気ですか？」

必死に涙をこらえながら詰問する私に、母は優しく微笑んで答え

た。

「ごめんね、マルシラ。お母様ね、あなたとお父様より大事な人ができちゃったの」

いつものように美しく微笑んで、母は幸せそうにお腹を撫でた。その母の笑顔に、私は生まれて初めて憎しみを覚えた。

「お母様はバートリー家の伯爵夫人でありながら不貞を働くとは、恥ずかしくはないのですか！　お父様と私をなんだと思っているのですか！」

とうとうこらえきれずに、涙は堰を切る。そんな私の顔を見ながら、なおも母は笑顔を崩さない。

「なにかしらね？　今はもう、なんでもないわ」

目の前で微笑む美しい女は、既に私の母ではなかった。毒婦――――。今の母に似あいの言葉。母の様になるな、そう言った父の言葉をようやく理解した。

「お母様、あなた酷い人だわ。私とお父様はお母様をとても大事に思って、愛しているのに、なぜそんな酷い事を言うの？」
「仕方がないわ。だって私、お父様もあなたも愛してないんだもの。今は別の人を愛しているし、愛している人の間に生まれてくる子供

を愛しているんだもの」

これ以上言葉を重ねても、いたずらに傷つけられるだけだと思った。本当に終わってしまったのだと悟った。この人にもう、私と父は必要ない、この人のとび色の目には私達がもう映されることはない。そう、悟った。

「エリザベート、お前は女である以上に、伯爵夫人としての義務とマルシラの母であるという責務を果たさなければならない。お前がどれだけ放蕩しようとも、不貞を働こうとも構わないが、それだけは忘れてくれるな」

涙に暮れる私を父は優しく抱きしめて、そう母に向けて冷たく言い放ち、私を連れて母の部屋から退室した。

その後、母は何度も父に離婚を迫った。その度に父は怒り母はヒステリーを起こし、交渉は決着を見ることはなく、憔悴していく父を宥める毎日だった。

日ごと憔悴し、やつれていく父の姿を見るのが悲しかった。朗らかでおおらかだった父は今は見る影もない。母の非道な仕打ちに耐え難きを耐え、それでも私の為に私の前では笑顔を取り繕おうとする父が悲しかった。

父をそんな風に変えてしまった母を許せなかった。

でも、そんな母を許せなかったのはやはり私以上に父であって、そんな毎日にストレスと憎悪をため込んでいた父はある夜、とうとうその黒く淀んだ感情を爆発させた。

もう、その頃の父は父ではなかった。精神の破壊を止める為なのか、毎日浴びる様に酒を飲み、その為により一層精神は破壊されていた。

その夜、いつもより遅く帰宅した父は、すっきりとした表情をしていた。父が纏っていたのは、憑き物が落ちたかのような表情だけではなく、上等なビロードの、朝はダークグレーだったはずの赤黒く染まった外套。

その日父は、母と侯爵の同衾の現場に乗り込んで、母と侯爵を殺した。

父の告白に、頭が真っ白になった。喜べばいいのか悲しめばいいのか、子供の私にはわからずに、ただ、父の所業が恐ろしかった。父にそこまでさせてしまった母と、父を止められなかった自分に憤りを感じた。

「心配することはないマルシラ。貴族は殺人を犯しても罪に問われることはない。これからはずっと二人で幸せに生きていけるよ。もう、私達を悩ませるものは何もないのだから」

父の笑顔に涙が零れた。父は、可哀想な人だ。私と自分の矜持を守るために、愛した女性でさえも屠った。可哀想なお父様。私が父を守らなければ、きっと壊れてしまう。

父を抱きしめて、お父様をずっとずっと、私が守らなきゃ。そう誓った。

第2話　ヴァーミリオン

父と二人三脚での生活が始まった。厳密にはメイドもいたし二人きりではなかったけど。

母を殺してから、父は以前のような父に戻りつつあった。最初の頃は達成感と罪悪感に板挟みになっていたようだったけど、そのどちらとも時間と共に薄れてきたのか、父の顔には笑顔が浮かんでくるようになり、酒も絶ち、朗らかな父を取り戻しつつあった。

それなのに、時間は新たな苦悩を連れてゆっくりと確実に訪れる。

母が死んでから3年経ったある日、父が言った。

「マルシラ、お前は最近より一層エリザベートに似てきたようだな」

以前なら大喜びしたであろうこの言葉に、不安を覚えた。もし父が今でも母を愛していて憎んでいたとしたら、私と母を重ねてしまうかもしれない。その予感は的中した。

ある日父と連れ立っていったパーティーの席で、父は男性を突然殴り付けた。私に「伯爵のお嬢様もお美しいですね」と声をかけただけで。

「誰も娘に近寄るな！　この子は、マルシラは私だけのものだ！汚い目でマルシラを見るな！」

明らかに異常だった。母を殺してから父にはもう私しかいない。母は籠から放たれた鳥のように飛び去ろうとした。だから、父は私が傍から離れるのを極端に嫌うようになった。

私だけは誰にも奪わせはしないのだと言って、仕舞いには外出す

らも禁じられるようになった。
本来貴族の女性と言うのは滅多なことがなければ外出する物ではない。勉強も住み込みの家庭教師がいるし、衣裳も仕立て屋を屋敷に呼び寄せて作らせる。宝石や嗜好品も商人を屋敷に招くものだったから、外出するのは本当に用事がある時だけ。
実質的に生活することにおいてそう不便はなかったけど、籠の鳥は外の世界に憧れるもの。

そんなある日、家庭教師のマダム・トリトンが私を誘いに来た。
「お嬢様、今度劇場でロミオとジュリエットを演るそうですわ。お嬢様お好きでしょ？　見に行きませんこと？」
「本当！？　是非行きたいわ！　・・・でも、お父様がなんて言うかしら。きっと許してくれないわ」
「それなら心配ありませんわ！　小間使いのターニャがおりますでしょ？　あの子声はお嬢様に良く似てますから、部屋に閉じこもらせて寝たふりでもしていればごまかせますわよ」
「まぁ、マダムったら悪い顔をしているわ。さすがは教師ね」
「うふふ、頭と言うのはこういう風に使う物ですわ」
いたずらっぽく笑うマダムトリトンについ釣られて、私は首を縦に振った。そして数日後、私の衣裳を着たターニャに部屋に籠っているように言いつけて、マダムと共に劇場へ足を運んだ。

私はシェイクスピアの戯曲が大好きで、特にロミオとジュリエットが好きだった。悲しい恋の物語。だけど、二人の純粋でひたむきな愛に憧れた。
いつかは私もそう言う恋をしてみたい。貴族だからきっと将来結婚する相手も貴族だわ。その人と、私はロミオとジュリエットのような恋をできるかしら、そうなったら素敵だわ。そんな風に憧れを持つ、ごく普通の少女。

貴賓席でグラス越しに見える、舞台の上で繰り広げられる愛のドラマに、その日も私はすっかり夢中になっていた。

その日、私は運命の人に出会った。

「お嬢さん、同席しても？」

「え、えぇ、構いませんことよ」

貴賓席に空席がなかったのか、同席を申し出てきた男性。衣裳や言葉のイントネーションがハンガリー人のモノではないようで、少しだけ興味が湧いた。

見た目は３０手前で、私よりは１０歳は上に見える。金色のくせのある短い髪、ブラウンの瞳、品があって端正な顔立ちに似合うシルクの燕尾服。思わず覗き込んだ私に気付いたのか、男性はこちらに向いて微笑む。

「あぁ、お嬢さん申し訳ない。私はラインハルト・フォン・カルンシュタイン。オーストリアのしがない伯爵家の者です。仕事でハンガリーにきていて、息抜きついでに今日は劇場に。お嬢さんは？」

「私はバートリー・フェレンツ伯爵の娘で、バートリー・マルシラと申します」

「あぁ、ハンガリーは西欧と違って姓名が逆なのだね。バートリー家とは、あのトランシルヴァニアの名門の？」

「ええ。でも私のうちは分家ですの」

「いや、嬉しいな。バートリー家のお嬢様と知己になれるとは、私はツイてる」

「まぁ、野心家ですのね」

「男はみんな野心家だよ。それに、マルシラ嬢がバートリー家の人間でなくても、私はやはりツイてる」

「なぜですの？」

「君が、美しいから。私は君の様に美しい女性は、今まで見たことがないよ」

カルンシュタイン伯爵に出会うまで、私は恋なんて知らなかった。初心で、世間知らずで、恋に恋する少女。相手は大人の男性で、その言葉が社交辞令だなんてわからなくて、私の心臓は鼓動を早めた。

美しいなんて、言われ慣れた言葉。小さい頃から、母と一緒に出掛けた先で、美しい、可愛い、薔薇のようだ、天使のようだ。言われ慣れて、言われ過ぎて、「ごきげんよう」と同じようにしか響かなくなってしまった言葉なのに、なぜかカルンシュタイン伯爵に言われた時だけ、心が動かされた。

これがきっと恋なのね。これがきっとときめきなのね。私はこの男性に恋をしたのだわ。そう思うと、素敵な伯爵がより素敵に見えて、胸が高鳴って、あれほど楽しみにしていたロミオとジュリエットの恋の結末なんて、ちっとも頭に入ってこなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9594v/

コントラクト外伝　－紅い薔薇と白い薔薇－

2011年12月18日03時06分発行